

英知通



昭和56年4月30日

英知大学

No.31

入学式式辞 「英知」を求めて

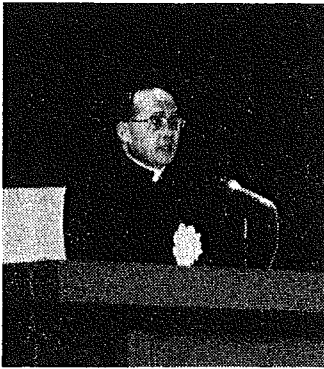
充実した学生生活を

学長 傘木澄男

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。ご父兄の皆様にも心からお祝い申し上げます。きょうから皆さんは本大学の構成員となられたのですから、私はいまここに大学について、特に英知大学について、また本学におけるこれからの学生生活のあり方について私の感想を申し述べて、皆さんの自覚を求めたいと思います。

大学とは

まず大学とは何でしょうか。大学という所は小・中・高等学校とは異なる教育機関であります。大学のことをユニバーシティといいますが、これは中世ヨーロッパの主要都市につくられた高等教育機関の名称として用いられたラテン語のウニベルシタスという言葉に由来します。この言葉には「教授と学生が共通の目的によって結ばれた共同体」という意



味と、「学問のすべての分野を教授し、あらゆる知識の総合をめざす所」という二つの意味がこめられていました。どんな時代にも大学はこの二つの面を保持していかなければなりませんし、このことは現代の日本の大学にも当てはまります。大学はまず研究・教育・勉学のすべてにおいて常に共通の目的と理想をお互いに自覚し、共同して作りあげていく共同体であり、教職員と学生が、また学生同士が相互の尊敬と信頼によって結ばれ助け合う共同体でなければなりません。英知大学は幸い小規模な大学ですから、自然に和やかな家庭的な雰囲気は備わっています。しかしそれが直ちに共同体となるものではありません。共同体はあくまでも共通の目的意識と、それに向っての謙虚な反省と相互協力による不断の努力によってのみ実現するものであります。そしてこういう共同体において始めて個々人の成長と自己実現が可能となります。英知大学はそういう生きた共同体でありたいのであります。

りもこういう教育と研究の共同体であることを自覚し、そういうものとして本学を充実させていくよう私は皆さんに期待するものであります。

「英知」を求める大学

次に、英知大学とはどういう大学でしょうか。英知大学はまずカトリック大学であります。カトリック精神に基づく教育並びに学問研究という明確な建学の精神をもつ大学であります。このキリスト教精神、カトリック的教育理念とは一言で云えば人間の尊厳性ということですが、今日の人間性・精神的諸価値が、しばしば軽視され、踏みこじられつつある状況の中で、人格尊厳の自覚を堅持していくためには、人間人格を単に人間性という自然本性の枠内に閉じ込められたものとしてではなく、これを創造主なる神の本性と一致にまで呼ばれ、開かれた存在として見る、人間の超越性という信仰的な確信とビジョンが不可欠のものとなるのであります。カトリックの教育理念とはまさにこれであります。

次に英知大学は、その名の通り「英知」サピエンチアを理想としている大学です。本館の建物の壁に大理石の像が掛つていて、ラテン語でセデス・サピエンチアエと書いた文字があります。これは「英知の座」を意味し、古来永遠の英知の見える姿であるイエス・キリストを世界に掲げ示す聖母マリアに与えられてきた呼称です。サピエンチア、英知とは経験によって得られる知識や知恵ではなく、神から与えられ照らされる知恵であり、人間をその源である神にまで導き、そこにおいて真の完成に到達させる知恵のことであり、この英知による完成を人間の理想とする人間観はキリスト教的ヒューマニズムとも呼ばれますが、これは単なる人間中心のヒューマニズムではなく、人間を真に人間たらしめるところの完全なるヒューマニズムであります。どうか英知大学がこの英知、サピエンチアを建学の理想として、この理想を知って下さり、これから本学において、この理想を皆さん自身のものとして追求して頂きたいのであります。

国際人の育成

ところでこうした教育理念の中には当然国際人の育成ということが含まれております。これからの日本人、特に高等教育を受けた者は皆国際人とならねばなりません。国際人となるためには外国語や外国文化の知識、また国際的良識と視野が必要であることは勿論ですが、それよりも根本的なものは私共日本人の心の底にいまだに巣喰う精神的鎖国状態、自己中心的な排他主義をきつぱりと捨てて、共に「人間であること」において地球上のあらゆる人々と連帯を保持し得る普遍性の感覚を持つこととで、これこそ国際人の要件であります。そのために国際的・世界的宗教として人間的・普遍的諸価値を明確に掲げ教えたきたキリスト教に学ぶ姿勢が今日大いに望まれるのであります。この点英知大学に入学されたことを貴重なチャンスと考えて頂きたいのであります。

今日人類の歴史には新しい時代が始まっており、根源的な変革が世界に広まっています。それは人間の生活様式や物の考え方だけではなく人間自体をも巻き込み変革しつつあります。今こそ「人間とは何か」という深い真剣な問いかけが一人ひとり求められています。そこにおいて人間の真の解放と幸福は神を否定し

た独断的な生き方の中にはなく、いかなる時代においても神との真剣な関わりの中のみ見出されるものであるとするキリスト教的人間像こそ、今日私共を導く真の人間像であると信じます。ところでこの神との関わりは、人々の内に神を見出だすところの人間関係、他者との関わりの中で現実化されるのです。他者に心を開き、人々との出会いを通して自己を確立していくところに人間本来の姿があります。「他者のために生きる生き方」を求めることが人格形成の目標であり、これこそキリスト教的人間教育の理想であります。

理解力、思考力を

私は皆さんに、大学生になった以上学生の仕事である勉強をして下さい、勉学に励んで下さいと訴えたいのです。今の大学生の学力低下は残念ながら明白な事実であります。その責任がどこにあるかは今は問わないとして、学力の低下、その不足の将来のためにもまことに憂慮すべきことでもあります。今は確かに専門的な知識の量は増え、その水準は高まっていますが、それよりも大切なもの、即ち、学問研究と文化の発展に不可欠な、物事を理解する力、考える力、またおよそ問題意識というもののが低下していることが重大なものであります。こういう事態の原因と考えられるものの中で、やはり読書の習慣が失なわれ、活字離れが蔓延してしまっただけがその最たるものであります。

昔から「読み、書き、そろばん」と云われますように、学問の基礎はあくまでも読んで理解する力、自分の言葉で表現する力、また論理的に筋を通して考える訓練であります。私は皆さんに今こそ活字離れにス

トップをかけ、代りに漫画離れを実行し、できるだけ本を読み、文章の理解力と書く力を養って欲しいのです。社会に出てからこれがどれ程皆さんの力になるか量り知れない程です。立派な図書館もあります。大いに利用して下さい。第一、本学で外国語を勉強するといいますが、外国語である国語もろくろくできないようでは、同じ人間の言葉である外国語の学習、ましてそれをマスターすることなどまことにおぼつかないことでもあります。

大学はただ青春をエンジョイするだけの所ではありません。確かに社会は大学生に相当の自由を容認しますが、しかしそれは、高校卒業までは押えつけられていたから、また実社会に出れば苦労するから、その中間の大学では呑気に人生をエンジョイしてもよいということではありません。大学生活はいわば社会から一定期間の猶予を与えられ、社会の束縛を受けずに、自由に考え、学ぶことを許される期間であります。それは実利実益を度外視して、自己の目標を定め、これに向かって最大限の努力をすることが、その後の人生において人間の真の目標に向けての大きな成長と実力の土台となるからであり、ここにこそ青春期の、また大学生活の意義があるのです。しかしこのことは自分のことしか考えない、自己中心、未成熟の状態にいつまでも留まって成長を拒否する態度を、いかなる意味でも許すものではないのです。

今わが国では、大学への進学者、またその卒業者は年々増加し、その結果いよいよ学歴の重みは減少し、「学歴社会」は影を薄めてきています。代ってこれからは次第に生涯を通じて努力を評価していくこととする「学習社会」、「学力社会」となっ

ていくでしょう。もし皆さんの中に「大学では出来るだけ楽に単位を取り、何とか卒業の資格を得られればそれでよい」という考えだけの方がおられたならば、こういう人は貴重な四年間を確実に無駄にし、卒業に必要な単位の取得も危ないものとなるでしょう。途中で挫折し、脱落していくことのないように、どうか皆さんは「大学は勉強しなければ卒業のできない所だ。大学に入った以上は勉学を当然のこととして実力を身につけよう。大学はそのためのものだ。」という決心を今更めて固めていただきたいのであります。

大学での人間形成

最後に大学における人間形成ということについて一言申し述べたいと思います。大学は専門教育の場であると共に人間教育の場でもあります。今社会が大学に最も強く求め、期待しているものは人間教育であり、専門教育は専門学校その他各種の機関においてもできることです。莫大な経済的負担を負って子弟を大学に送り、そこで四年間も過ごさせることにどれ程の価値があるかと問われる時、その疑問に答えて大学が社会を、また父兄を納得させることができるのであれば、それは人間教育ということでありましょう。

一般に私立大学は、独自の建学の精神を持ち、人間形成をその中心に据えております。私共もきょう更めて本学の建学の精神を自覚し、人間形成の実を挙げることによって、社会に対する責任を果たしていかなければならないと強く感じております。

祝辞

英知大学後援会会長

東 功

ますが、専門教育重視の観点からは余計なことのように見えるこれら教養科目を皆さんはどうか、その目的と精神を理解して、まじめに履修していただきたいのであります。今日大学進学率が高くなったとは云え、まだ高校卒業生の大多数は直ぐ実社会に出て働いているのが現状です。幸い皆さんは進学の機会に恵まれたのですから、この特権に伴なう社会的責任を自覚して、ふさわしい学生生活を送って下さい。最後に、ご父兄の皆様にも、きょう入学されたご子弟がこれから幸せな、実りある学生生活を送られますよう今までも同様、温かく見守り、ご援助とご協力を下さいますようお願いいたします。これをおもちまして式辞とさせていただきます。

桜花爛漫の今日の佳き日、激しい受験競争を勝ち抜かれましての入学式誠にお目出度うございます。一言燕辞を述べまして祝辞に代えさせていただきます。

入学案内に書いてあります通り、当大学はカトリックの宗教的理念に基づき人格の陶冶に重点を置き、傘木学長先生はじめ優れた先生方と僅か千名前後の学生が尊敬し信頼し合っている今時珍らしい存在のコンパクトな大学であります。創立後未だ二十年に達していませんが施設も整備されていますので勉学には最高の環境であると存じます。さて教育の本来の目的は、学問を

通じての人間形成、自立的精神の養成(持っている知識を総合的に生かし乍ら独力で発掘し独自の解決策を見つけ出す姿勢と能力を養う)、並びに個人の才能の開発(人間として与えられた自分の才能を自分の努力によって発展させる)にあり、この目的に向って励む所が大学であります。ところが近頃は、学問をしたい人が大学に行くのではなく、親の夢を果すために遊びに行くグループになつていたり、また学資を稼ぐために働き乍ら学問に精を出すのではなく遊ぶ資金を稼ぎに職業につく「学生業」についている学生が少くありません。そのため昔「学士」様今は「楽士」さまとさえ言われています。入学した事で目的を達したと錯覚して自己鍛練を忘れて貴重な大学生生活を浪費する様なことがないよう、学問は勿論のこと文化研究、スポーツ等のクラブ活動に精を出して四年後に悔が残らぬよう潑刺として有意義に送られる事をお祈り申し上げます。

次にこの機会をかりまして後援会のことにつきご列席のご家族の方に申し上げます。後援会のご会則に詳しく説明させていただきますので簡単に申し上げます。「大学の教育事業を援助し発展に寄与すること。大学の教育理念を理解し会員相互の親睦を図ること」でございます。その事業として学長、教授方の講演とその後の大学の先生方にもご出席頂きましての会員相互の親睦会が年に二、三回ございます。学園の醸し出すカトリック精神の厳かさや和やかさの雰囲気の中で楽しい会合でございます。先輩各位から受け継ぎましたこのうるわしい催しの輪をもっともっと大きく拡げて行きたいと存じますので、万障お繰合せの上奮ってご参加下さる様お願い申し上げます。

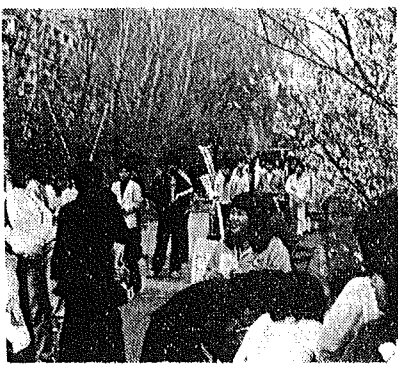
昭和五十六年度

入学式挙行

昭和五十六年度入学式は四月六日(月)午前十時から本学講堂で挙行された。

当日は陽光うららかな好天に恵まれ、式は本学混声合唱団の聖歌によって厳粛に始められた。まず神学科七名、英文学科百六十四名、西文学科五十六名、仏文学科五十三名、計二百八十名の入学者の指名が行なわれた。傘木学長の式辞(別掲)に続いて、来賓の東後援会会長(別掲)が、次いで上智大学の高橋憲一教授が学長代理として祝辞を述べられた。高橋教授は、本学と上智大学との親密な結びつきについて説明した後、別掲のような要旨の挨拶をされた。

式終了後クラスごとの記念撮影が行われ、午後一時からは傘木学長のユーモアを交えた講話があり、続いて学科別紹介のあと、アドバイザー制に基づくグループ分けが行われた。このアドバイザー制は、新入生を六、七名のグループに分けて各専任教員が一グループを担当し、勉強や学生生活上の問題全般について相談にのるものであるが、このあと新



入生はグループ別に担当者とミーティングを行った。翌七日からは各種の盛沢山のオリエンテーション(別掲)が始められ、新入生はさわやかな緊張のうちに大学生生活へのスタートを切った。

入学式来賓

高橋憲一教授祝辞(要旨)

昨今、大学は共同体であるとともにいわれているが、もっとはつきり云えば、大学は有機体であり、生きたものである。だから活動が一日停滞すれば、その時、進歩が止ったというだけでなく退歩がある。生命あるものは進歩するか退歩するかは必ずれかである。

きょう新たに約三百名の入学者を迎えたという事は英知大学という有機体で新しい血液が注入されたと同じことだ。これによって建学の理想が維持され、本学は今後ますますその目的に向けて発展することが可能なのである。

本学はカトリック大学であり、入学したからにはまず「カトリズムとは何であるか」という事に目を向けて、今後四年間でその答えをどう出すかという研究におおいに力を注いでいただきたい。入学式を迎えたきょう、個々人の発展の将来については立派な人間になる、社会で有益な働きをする、高度の幸福を培うなどさまざまな理想があろう。しかしながら立派な人間とは何か、社会とは、有益であるとは何か、という事は簡単には答えられないものだ。この抽象的なことに答えるのが世界観や価値観、人生観という言葉であり、カトリシズムはこれに対して立派な答えを与えてきた。世の中には理想主義を唱えながら、言行不一致の人間が少なくないし、世界観や価値

観のような高尚なことは他人に任せておけばいい、自分は堅実に生き人に迷惑をかけず、ささやかながらも確実な幸福をつくりあげていく、という考えも否定はできない。またそれ自体立派なことでもある。しかしそれはあまりにもみみっちい理想で、こういう考えでは個人はもろろん、周囲の人を幸福にできるというものでもない。

このような小さな理想を画いている人々の中には、社会全体や世界の問題などは少数のエリートがやってくれるだろうから私の知ったことではないと考えている人も少なくないだろう。が本当のエリートというのは存在するのだろうか。

「世界は第三次大戦をあえてする事ができないけれども、同時に迫りつつある破局、カタストロフィを避けることもできない。食糧問題が解決されなければ、今後五十年に世界は混乱に陥るだろう。世界のすべての国民は国家の歳入の半を次の戦争の準備にあて、兵器を造ることに全力を挙げている。農業の改良だけが文化に確かな基礎を与えることができるのである。」

これは国際政治上で世界の食糧問題の解決に寄与したイギリスのポイド(Poind)によって、一九四七年に国連の総会で演説されたことばである。ポイドが世界に向けて発したこの警告以来一九八一年のきょうまで長い年月を経過しながら何一つ改善されることなく、人類は今なお第三次世界大戦の不安に怯え、飢えに苦しんでいる人の非常に多いというこの事実を考える時、いわゆる少数派のエリートにものを任せておいてはいけなないと思ふのである。我々が自分の分に応じて考える幸福は砂上の楼閣のような幸福であって、うっかりすると足元がぐずれてしまう

という恐れが多分にある。我々は教員といわず学生といわず、政治家や産業者といわず、一つの目標、即ち世界全体の公平な秩序の維持ということについて、一人ひとりが真面目に考えなければならぬのである。きょう社会に一步を踏み出した皆さんは公平な目で物事を見る立場にいる。皆さんに与えられた自由、即ち社会人としての多くの義務を免除して広い視野を培うことに役立つために与えられた「学生」というこの自由を、有益なことにために用いてほしい。ある程度年を経た者が若い世代に期待するものは大きい。その期待を、願いを、そして我々年長者の祈りをどうか聞き入れていただきたい。(文責・広報室)

昭和五十六年度 入学試験状況

昭和五十六年度入学試験は、推薦入学(五十五年十二月三、四、五日)試験入学(五十六年二月十六、十七、十八日)の二回実施した。入学試験の結果は次の通り。

競争率	卒業年比 %		男女比 %	
	推薦	試験	男	女
英文学科	2.43	81	70	
	2.27	19	30	
	2.35			
西文学科	2.39	80	71	
	3.21	20	29	
	2.79			
仏文学科	2.04	76	78	
	1.81	24	22	
	1.89			

出願者数	受験者数		合格者数		手続者数		入学者数	
	推薦	試験	推薦	試験	推薦	試験	推薦	試験
神学科	3	4	3	3	3	2	3	1
男女計	0	3	0	3	0	3	0	3
英文学科	203	256	198	232	69	91	53	68
男女計	62	60	60	43	37	30	29	16
西文学科	265	316	258	275	106	121	82	84
男女計	73	94	72	91	24	25	21	19
仏文学科	15	16	14	15	12	8	9	7
男女計	88	110	86	106	36	33	30	26
合 計	40	80	40	77	16	40	9	31
男女計	11	11	11	8	9	7	6	7
計	51	91	51	85	25	47	15	38
男女計	319	434	313	403	112	158	86	119
計	88	90	85	69	58	48	44	33
計	407	524	398	472	170	206	130	152

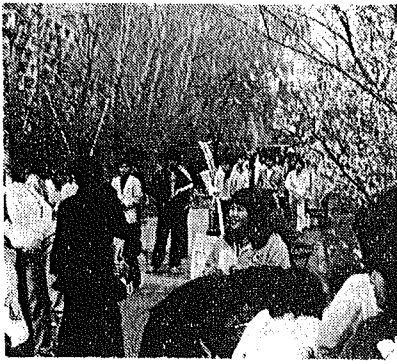
昭和五十六年度入学者出身高校
啓光学園 清風、育英、百合学院、久米田、上宮、大鉄、三田学園、島上、箕面自由学園、箕面学園、藤井寺、成器、大商大附属、滝川、赤塚山、愛徳学園 大阪、高石、住之江

昭和五十六年度

入学式挙行

昭和五十六年度入学式は四月六日(月)午前十時から本学講堂で挙行された。

当日は陽光うららかな好天に恵まれ、式は本学混声合唱団の聖歌によって厳粛に始められた。まず神学科七名、英文学科百六十四名、西文学科五十六名、仏文学科五十三名、計二百八十名の入学者の指名が行なわれた。傘木学長の式辞(別掲)に続いて、来賓の東後援会会長(別掲)が、次いで上智大学の高橋憲一教授が学長代理として、祝辞を述べられた。高橋教授は、本学と上智大学との親密な結びつきについて説明した後、別掲のような要旨の挨拶をされた。



式終了後クラスごとの記念撮影が行われ、午後一時からは傘木学長のユーモアを交えた講話があり、続いて学科別紹介のあと、アドバイザー制に基づくグループ分けが行われた。このアドバイザー制は、新入生を六、七名のグループに分けて各専任教員がグループを担当し、勉学や学生生活上の問題全般について相談のるものであるが、このあと新

入生はグループ別に担当者とミーティングを行った。翌七日からは各種の盛沢山のオリエンテーション(別掲)が始められ、新入生はさわやかな緊張のうちに大学生生活へのスタートを切った。

入学式来賓

高橋憲一教授祝辞(要旨)

昨今、大学は共同体であるといわれ、大学は有機体であり、生きものである。だから活動が一日停滞すれば、その時、進歩が止ったというだけでなく退歩がある。生命あるものは進歩するか退歩するかはかたきかである。

きょう新たに約三百名の入学者を迎えたという事は英知大学という有機体に新しい血液が注入されたと同じことだ。これによって建学の理想が維持され、本学は今後ますますその目的に向って発展することが可能なのである。

本学はカトリック大学であり、入学したからにはまず「カトリシズムとは何であるか」という事に目を向けて、今後四年間でその答えをどう出すかという研究におおいに力を注いでいただきたい。入学式を迎えたきょう、個々人の発展の将来については立派な人間になる、社会で有益な働らきをする、高度の幸福を培うなどさまざまな理想があるろう。しかしながら立派な人間とは何か、社会とは、有益であるとは何か、という事は簡単には答えられないものだ。この抽象的なことに答えるのが世界観や価値観、人生観という言葉であり、カトリシズムはこれに対して立派な答えを与えてきた。世の中には理想主義を唱えながら、言行不一致の人間が少なくないし、世界観や価値観

のようないかなる高貴なことは他人に任せておけばいい、自分は堅実に生き人に迷惑をかけず、ささやかながらも確実な幸福をつくりあげていく、という考えも否定はできない。またそれ自体立派なことでもある。しかしそれはあまりにもみみっちい理想で、こういう考えでは個人はもろろん、周囲の人を幸福にできるというものでもない。

このような小さな理想を画いている人々の中には、社会全体や世界の問題などは少数のエリートがやってくれるだろうから私の知ったことではないと考えている人も少なくないだろう。が本当のエリートというのは存在するのだろうか。

「世界は第三次大戦をあえてする事ができないけれども、同時に迫りつつある破局、カタストロフィを避けることもできない。食糧問題が解決されなければ、今後五十年に世界は混乱に陥るだろう。世界のすべての国民は国家の歳入の半を次の戦争の準備に充て、兵器を造ることに全力を挙げてゐる。農業の改良だけが文化に確かな基礎を与えることができるのである。」

これは国際政治上で世界の食糧問題の解決に寄与したイギリスのポイド(Boyd)によって、一九四七年に国連の総会で演説されたことばである。ポイドが世界に向けて発したこの警告以来一九八一年のきょうまで長い年月を経過しながら何一つ改善されることなく、人類は今なお第三次世界大戦の不安に怯え、飢えに苦しんでいる人の非常に多いというこの事実を考える時、いわゆる少数派のエリートにものを任せておいていはいはずはないと思うのである。我々が自分の分に応じて考える幸福は砂上の楼閣のような幸福であって、うっかりすると足元がぐずれてしま

という恐れが多分にある。我々は教員といわず学生といわず、政治家や産業人といわず、一つの目標、即ち世界全体の公平な秩序の維持ということについて、一人ひとりが真面目に考えなければならぬのである。きょう社会に一步を踏み出した皆さんは公平な目で物事を見る立場にいる。皆さんに与えられた自由、即ち社会人としての多くの義務を免除して広い視野を培うことに役立つために与えられた「学生」というこの自由を、有益なことにために用いてほしい。ある程度年を経た者が若い世代に期待するものは大きい。その期待を、願いを、そして我々年長者の祈りをどうか聞き取っていただきたい。(文責・広報室)

昭和五十六年度 入学試験状況

昭和五十六年度入学試験は、推薦入学(五十五年十二月三、四、五日)試験入学(五十六年二月十六、十七、十八日)の二回実施した。入学試験の結果は次の通り。

Table with columns for competition rate (競争率), graduation ratio (卒業年比), and gender ratio (男女比) for English, Western, and French departments.

Large table showing the number of applicants (出願者数), examinees (受験者数), and合格者数 (合格者数) for various departments like Theology, English, Western, and French.

昭和五十六年度入学者出身高校 啓光学園、清風、育英、百合学院、久米田、上宮、大鉄、三田学園、島上、箕面自由学園、箕面学園、藤井寺、成器、大商大附属、滝川、赤塚山、愛徳学園、大阪、高石、住之江

山本、琴丘、仁川学院、西沢木、桃山学院、北沢、渋谷、大商大堺、桜宮、高槻北、信愛女子短大附属、刀根山、伊田谷、神戸北、宝塚、啓明女学院、報徳、明石商業、神港、有馬、甲子園、川西明峰、三木、西宮南、高砂、市尼崎、洛南、大谷、榛原、関西、作陽、丸岡、泰星、東豊中、豊島、松原、柴島、島本、金岡被昇天、長野、枚方、柏原東、交野東淀川、登美丘、箕面東、大阪貿易学院、近大附属、初芝、追手門大手前、布施、北陽、伯太、市岡商業、泉尾、城星、関西大倉、興国、牧野南寝屋川、南、明星、浪速、大手前大阪女学院、大阪市立、摂津、四条噺学園、勝山、清教学園、社、西宮北、柳学園、佐用、千種、市伊丹、尼崎北、尼崎東、姫路、播磨、東灘水上西、川西緑台、香寺、賢明女学院、村野工業、武庫荘、村岡、舞子市西宮、西宮東、洲本実業、鈴蘭台八代学院、城陽、桃山、ノートルダム女学院、平安、洛北、東舞鶴、平安女学院、斑鳥、天理、添上、樞原奈良育英、串本、米原、宇治山田、鉦路工業、東北学院榴ヶ岡、白河、星美学院、上田東、鯖江、北陸、横須賀、尾西、星城、鴨方、岡山理大附属、山陽女子、御調、崇徳、松永松徳女学院、松江工業、隠岐、多々良学園、弓削、大手前高松、高松商業、長崎商業、大矢野、鹿児島南。

図書館だより

現在蔵書数は六五、六〇二冊となり、去年一年間で六、二五〇冊増加した。これには去年度末に整理の完了した「田口文庫」(別掲)約二、五〇〇冊も含まれており、年間平均整理冊数の約半分にあたる量である。神学関係では貴重なコレクションであるPatrologia—教父全集(三二二

昭和56年度 入学式およびオリエンテーション日程

10:00	入学式	東 大
1:00	学 生 会	11:30 教養
2:00	学 科 展 覧 会 (学科別)	東文学科 11:30 教養 西文学科 2:15 教養 仏文学科 2:15 教養 理 学 科 2:15 教養
2:30	アドバイザー制ガイダンス (クラス別)	東文学科 1 組 2:15 教養 2 組 2:15 教養 3 組 2:15 教養 西文学科 2:15 教養 仏文学科 2:15 教養 理 学 科 2:15 教養
3:00	アドバイザー制ガイダンス (学科別)	

7:00	入学式	東 大
8:00	学 生 会	11:30 教養
9:00	学 科 展 覧 会 (学科別)	東文学科 11:30 教養 西文学科 2:15 教養 仏文学科 2:15 教養 理 学 科 2:15 教養
10:00	アドバイザー制ガイダンス (クラス別)	東文学科 1 組 2:15 教養 2 組 2:15 教養 3 組 2:15 教養 西文学科 2:15 教養 仏文学科 2:15 教養 理 学 科 2:15 教養
11:00	アドバイザー制ガイダンス (学科別)	

今年度の入学式およびオリエンテーションは別表の要領で行なわれた。入学式当日はさすがに緊張のためか午後のアドバイザー制に基づくグループ分けの頃は、皆かなり疲れていたようである。しかし、新入生約二百八十名が一堂に会した時はかなり多いという印象であったが、グループに分けると、一人の先生に対して学生数多量という割合になるので大学として新入生を責任をもって受け入れられるという実感であった。このアドバイザー制も昨年の経験より、原則として最初の二ヶ月程に限られたが、新しい環境での最初の二ヶ月は非常に大切な時期であり効果が期待されている。

第二日目以降のガイダンス、従来は午前中だけであったため、教務課学生課とも二日間にまたがり色々な

新入生オリエンテーション

九冊受入、購入額四、八六九、七三八円)も整理され、利用を待つばかりになっている。

一段と充実してきたこれらの図書資料の利用の増進を計ることは、目下、本学図書館でも大きな課題となっている。これに少しでも応じられるよう、四月には二階参考図書コーナーの机を木製のもの(六人掛け、計六脚)に入れ替え、今までよりも

不都合があった。特に学生課のガイダンスでは新入生の学生証を渡すためそれが三日目になった学生は三日目まで通学定期を買うことができず、常には混乱の原因となっていたのが、今年度は全員同じ日に学生証を渡すことができ、その混乱もなかった。

新入生にとっては、毎日かなりの時間、色々なことを聞いて戸惑いもあったであろうが、自分の入学した大学がどのような大学であるかというところを理解するオリエンテーションとしては、最低この程度は必要なのではなからうか。

また昨年より、新入生の履修登録をこのオリエンテーション週間に終えるようにしたので最初の授業から受けるべき授業が決まっており先生の方も授業がやりやすいはずである。(学生部長 松本信愛)

落ち着いた雰囲気の中で集中して勉学に励めるよう、同時に三階東の閲覧室の約半分のスペースをブラウジング・コーナーにあて、ここではゆとりとくつろいで資料に接することができるよう模様替えをした。このように機能的なスペース配分を計ることさらに使いやすい、誰もが利用する図書館をめざして意欲的に取り組んでいる。

ヨーロッパ語学研修旅行

学生部長 松本信愛

今回の「英知大学語学研修旅行」は積立方式を取り入れて初めてののものであった。総勢五十六名で、内訳は、三回生の英語研修三十一名、イスパニア語研修六名(内二名は別行動)、フランス語研修十名、上級生等で語学研修をしないでイギリス国内を見学した者五名、同行教員三名旅行社の添乗員一名であった。

二月二十五日に大阪国際空港を出発(現地時間)ロンドンに着き、二台のバスに分乗して市内観光、その日の夕方それぞれ語学研修地向かった。英語組はロンドンの南方向約二時間程のヘイスティングスというところで、各家庭に一人づつ滞在して学校へ通った。フランス語組は今回はホーム・ステイができなくて残念であったが、パリで語学研修を行なった。イスパニア語組はバルセロナに家庭滞在することができた。語学研修中も二回あった土曜・日曜は自由行動なのでそれぞれ好きなところへ行ったりした。研修の終わったところで全員パリへ集合、外国で久しぶりに会った感動はまた格別であった。翌日(三月十二日)二台のバスでパリ市内見学、三月十三日は自由行動で夕方ローマに向かった。汽車で出発した。ローマに丸二日滞在してアムステルダム経由で三月十七日に全員無事に帰国した。

今回の旅行で学生達が何を学んだかということは一概に言うことはできないが、一人一人全く新しい経験をしたはずなので、それを生かして残り一年の学生生活を有意義に過ごしてもらいたい。

「英文学ゆかりの地を訪ねて」

英文学科助教授 谷真嗣

第一回の英知大学語学研修旅行が二月二十五日から三月十七日まで行われ学生達は各々その専攻に従ってフランス、スペイン、及びイギリスのヘイスティングスに家庭滞在している間に私たち七人(四年生の四人を含めて)は、イギリスの文学と歴史の旅なるものを行った。学生達と別れ、ロンドンPaddington駅近くワースワースで有名な湖水地方に二泊し(筆者はもう一日滞在)Dove Cottage & Grasmere Village(あるいは Rydal Mount)等を訪問する。六人はスコットランドまで足をのばし、エディンバラに一泊して次の日遅くロンドンに戻って来る。ケンブリッジ、ローマ時代の浴場で有名なバース、チャールズの『カンタベリー物語』で有名なカンタベリー、ロンドンのTate Gallery, Westminster Abbey, Westminster Cathedral, British Museum, National Gallery, Tower of London等々、又各



一泊して次の日ワイ河に沿って上流に進みかつてワーズワースが『ティンタン』の中で歌った感動を味わって見たいともう一人の私がしきりに囁いている。「初めてこの山間に来りし時とは正しくわれ変りたれど、あえてこの希望を抱くなり。かつては小鹿のごとく峯を越え、深き河のほとり、寂しき小川の岸辺をわれ自然に導びかれるままにとび廻りしが、愛するものを追ひ求むるよりは、恐るものより遁れゆく人に似たりき。自然はその頃のわれに取りては凡てなりき。」

一瞬まるで十二世紀頃の寺院に戻ったような錯覚に襲われ廻りではショットの僧たちが一心に働き、彼等の声が聞えてくるようである。この寺院がまるで生きていくかのよう感じられる。しかし雨のしずくに想像力の翼に乗った自分は現実を引き戻され、目の前の寺院は石の廃墟にすぎない。後がみを引かれるかの如く、二時半のバスに乗り Chepstow まで戻り、夜八時近くロンドンの宿にもどってくる。その夜は強い印象の為に体がほてり、やや興奮気味であるが明日のストーン・ヘンジにそなえて十一時頃床につく。

たのしかった

ホームステイ

英文学科

松本裕子

この寺院は十二世紀のシスター教団の僧たちの僧院で、十六世紀にヘンリー八世によって破壊され、そのみじめな姿を空にさらしている。修復されることもなく、ただこれ以上朽ちていかないうちに少し手が加えられている。約二時間ここにどまっただけで写真を撮るが心は熱く、ここに

海外研修が終って、忘れられないのが二週間のホームステイでした。ヘスティングスの町はすぐそばに海があり、まるで童話の国からぬけ出したような家並みと16才のマーク七才のフェイイそしてアルゼンチンか

らの留学生パトリシアの五人家族でした。

会話はなかなか通じず四苦八苦したこともありました。しかし辞書を片手に一生懸命単語を変えて通じた時の感激は、言い表せないくらいうれいものです。二週間程度の短かい期間では目に見えて英語が上達するということはありませんが、日常会話は聞きとれるほどになったと思います。たった一人でイギリスの家庭に入り、絶対に話さなければならぬ状態におかれるという点ではとても勉強になったと思います。

学校に行く途中道に迷い30分も遅刻をしてしまったことや、正確に相手の言っていることが聞きとれず自分なりに理解して大変な食い違いがおこったなど、失敗は数えられないほどありました。しかし、今考えるとこのような体験がこれからの私に大きな励みとなるでしょう。そしてまた家族の親切は一生忘れることができません。

スペイン語学研修に

参加して

西文学科

竹中茂晴

今回の語学研修旅行に参加して自ら外国の文化や習慣を膚で感じることでできたのは良い経験になった。今後の人生にかなりプラスになる。何かを得られたかと思う。

二月二十五日に羽田を出発し、ロンドン市内観光後、ロンドン、パリバルセロナへと分かれて約二週間の語学研修を行なった。この間、学校での勉強の他に、授業後、思い思いに名所旧跡を回ることもできたし、



この旅行中で一番有意義に過ごせた期間であった。

実のところ、自分の語学力に少し不安はあったが、実際に会話をしてみると案外通じるものである。まず自分の殻に閉じこもらないことが大切。文法は間違っていないからとにかく積極的に話しかければ先方も理解しようとする。意志が相手に通じれば自信もついて新しい発見ができ、語学研修本来の目的が達成できる。僕の場合はこの旅行で積極性が得られた様に思う。

その後全員がパリで合流し、パリローマ、ナポリ、ボンペイと見学して三月十七日に帰国した。

もう一度機会があれば、「必ずホームステイ先へ行きたい。」これが全員の一致した意見だ。

次回の研修旅行に行かれる方は、現地では積極的に行動すれば必ずすばらしい旅行になるだろうし、又、どうしようかと迷っている方は、絶対に行くべきだ。就職してしまえば三週間も休みを取れるはずがないのだから、これだけの経験は、学生時代でなければできないと思う。

フランスで

考えたこと

仏文学科

山田祐子

研修旅行の三週間は、毎日、足が地にしつかりついでいかなかったような気がしました。短期間で何ヶ国もまわりました。イギリス、フランス、スイス、イタリア等。日本人とかフランス人という言葉はあまり好きではありませんが、その国その国のカラーミたいなものや国民性の違いをつくづく感じさせられました。

仏文科は、ホームステイができませんでした。毎日、ホテルで気楽には過ごせましたが、ホームステイの良さを知らずに帰国したことは残念です。授業は、仏文科10人だけのクラスでついつい日本語に頼って、先生の方がやりにくかったのではないかと思います。思っていることが言葉で言い表せないのが苦痛でした。

午後から週末を利用してできるだけいろいろな所に行くようにしました。外食する時が一番勉強になったように思います。ボーイさんとの会話ぬきでは食べられないし…。外食と言えど最初に一番困ったのがチップのことでした。お金の感覚もわからない頃、おつりをそのまま置いてきたりしていました。

飛行機みたいな鉄のかたまりが自然に反して空を飛ぶだけでも不思議なのに、大陸続きで他国へ汽車で行けるなんて変な気持ちでした。

会話力のなさもつくづく考えさせられました。何よりも反省させられたことは、何事をするでも一歩ひきさがってしまった積極性のなさです。

「田口文庫」開設

本学創立者故田口芳五郎枢機卿の約二千五百冊の蔵書が、「田口文庫」として整理公開されることとなった。田口先生が、カトリック教会の内外を問わず、残された足跡のかなりの部分がこの文庫に収められている。その領域は神学、哲学、法学、教育学など多岐に亘っているが、ここに文庫の二大特徴だけを指摘しておきたい。その一つは、戦時体制下田口先生が思想・信教の自由擁護のために奔走された事を示す著作・パンフレット類で、当時の国家主義思想、宗教政策と、それへの対応が思想、法制、実践の諸面に如実に認められる。二つめの特徴は、第二バチカン公会議に関する諸文献である。公会議では教父としては言うに及ばず、委員としてもその準備に関する資料もかなり含まれており、第二バチカン公会議の全貌を解明するまたとない貴重な資料の数々である。この他にも、万博バチカン館設立代表でもあられたところから、その方面の記録文書なども豊富で、まさに本学創立者の想像を絶する御活躍を示すものである。尤も、主題の性質上、無制限に公開できる訳ではないが、歴史的生き証人であられた創立者の面影を、「田口文庫」として本学図書館に収められたことは誠に意義深いことと言えよう。



チャールズのほとり



私は、チャールズ川のほとりで三年間程をすごした。チャールズ川というのは、ケムブリッジとケムブリッ

ジの間を流れる、ちょうど淀川ほどの川で、四季折々に実に多彩な表情をみせてくれる。ときには親しい友人として、またやさしい母として、そして冬にはアメリカらしい厳しさをもち、良きにつけ悪しきにつけチャールズはつねに私の傍にあった。

この川も、上流のケムブリッジ側では川巾もせまく、兩岸をうっそうと林におおわれたりして、いかにもニュー・イングランドの田舎らしい風情をもっているのだが、私の住んでいた下流のポストン側では、工場排水などで御多分にもれず汚染が進んでいた。

それでも川とは不思議なものだ。ひとの心をなげかかませる作用がある。おもいもかけず病にたおれ、研究を中断せざるを得なくなったりとき自然と足は川の方向にむかっ。帰国という苦しい決断をしたのも凍てつくチャールズのほとりであった。

そして半年後ポストンにもどったとき、チャールズのかわらぬ流れが私の心をどれほど安堵させたことか。友人たちもまたかわらぬ温かさでむかえてくれた。この街はもはや見知らぬ街ではなかったのだ。川は思惟するのにならなくてつけの場

沼野元義

(教養課程・心理学)

所だ。勉強に疲れたとき、また新しいアイデアを考えるために、私はなんとなくチャールズのほとりを、四季折々の風景の中で歩いた。

厳冬の一時期をのぞいて、ほぼ一年を通してよくチャールズのほとりを走ったものだ。春の川原には一面のタンポポや名も知らぬ花たちがまぶしいばかりだった。また人影もまばらになりはじめた秋のチャールズのほとりをひとり走りながら、人生とはマラソンのようなものだと思ったりもした。走りつづければいけない。たとえ遅々とした歩みでも歩きつづけることが大切なのだ。

夏はよくチャールズの上にヨットを出した。そしてそこから眺める街並みが一変して新鮮な輝きの中にあることを発見したとき、私はこの街がはじめてわたしのものになったことを実感した。

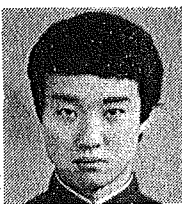
そして帰国して半年、母校の上智大学で教え、今私は淀川のほとりに移ってきた。思えばはるかな道のりをやってきたものだ。だが私は走りつづけている。淀川のほとりを、あたかも人生のマラソンの如く、大阪という私にとってははじめての都会でこの川もまた来るべき年月の中で私を温かく見守ってくれるだろう。

本学での担当は、心理学と統計学です。この人生のマラソンを、英知大学という希望にみちた新しい大学でつづけられることを心から誇りに思っています。学生諸君、職員のみならず、それに先輩の諸先生方、よくおねがいいたします。

英知大学に入学して

西文学科 上田治宏

大学に入学して、ふと高校時代の自分の姿を思い浮かべてみた。あの時代は、絶望や挫折感の波状攻撃に必死に耐えていたように思われる。また私自身落ちこぼれというレッテルをはられて、もがき苦しんでいた時代でもあった。この落ちこぼれというのは、世間一般には、勉強が嫌いで、墮落した学生のことをいうのだという固定観念がある。確かに今の世の中は学歴社会で、有名な大学にはいりたいがために、幼児期から英才教育というものを



をおしつけられ、他者のことは考えずに、何はともあれ勉強と、一日中このことばに追い立てられて来ている奴が多い。なるほど、このような奴から見れば勉強ができない学生は落ちこぼれということばで表現するだろう。私に關して云えば、ペーパーテストの結果はあまり良くなかった。だから進学校の人から見れば、落ちこぼれに見えただろう。しかし、落ちこぼれにも、真の実力を持った者がいると思う。私自身磨けば光る玉なのかもしれないし、あるいはただの石にすぎないかも知れない。とにかく大学生活を始めるにあたり、勉強と人間形成の日々を送る決心だと云えば模範解答的な表現かもしれないが、私は四年間退学も留年もせずに自分の持っている力を出し切ってみることに大切なことだと思ふ。わいは負けへんでやらいでか。

人事

三月三十一日付

退職 教授

湯次了豊

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

湯次了豊

ヤン・パン・

ホイドンク

楠瀬正致

藤本藤治郎

G・ペーキ

土田裕造

山崎正雄

アンドレア

・コレーン

ジョン・E

・バーガー

井田規文

沼野元義

奥村和滋

石田知一

瀬戸千恵子

甲田哲太郎

西田 弥

小川 淳

英知通信

昭和五十六年 四月三十日発行

編集 英知大学広報室

発行 兵庫県尼崎市若王寺

電話(06)四九二一五〇八三

六六一